

「情報科教育法」における模擬授業の取り組み

京都女子大学

平田 義隆

hiratay@kyoto-wu.ac.jp

1. はじめに

平成14年度に引き続き、15年度も京都女子大学現代社会学部において、「情報科教育法」の講義を行った。2年目ということもあり、14年度の反省を踏まえて講義を行った。その中でも特に、新しく行った試みの1つに、受講生全員による「模擬授業」が挙げられる。ここでは、この講義に対して行ったアンケートをもとに、学生たちによる模擬授業に対する考え方などをまとめたいと思う。

2. 模擬授業の概要について

模擬授業は、後期に開講される「情報科教育法2」の講義において行った。前期に開講される「情報科教育法1」では、学習指導要領をもとに、教科「情報」ではどういったことを生徒たちに教えていくのかについて講義を行っている。したがって、後期の講義はこれらを踏まえて、学習指導案や評価の問題などを考え、その後、模擬授業を受講生全員で行った。

後期には、講義が全部で12回あり、そのうち最初の3回は、学習指導案や評価の問題などについて、私が講義した。また、最終回については、情報科のこれからの課題などについて講義を行った。したがって、残りの8回を使って、学生たちに模擬授業をさせた。

模擬授業の形態についてであるが、実質の受講生が39名だったため、定員を1人から5人までという条件でグループを作らせた(14グループ出来た)。そして、1グループにつき40分という時間で、授業内容を考えさせて模擬授業を行った(各グループの人数や模擬授業の内容については後に述べる)。

3. 模擬授業の評価について

模擬授業を行った後には、生徒役の学生たちに毎回評価をさせた。1人に1枚ずつ評価シートを配り、グループごとに評価をさせた。評価シートには、あらかじめ項目を用意し、それらについて1から5までの数字を用いて5段階でつけさせた。評価基準、評価項目は右の通りである。

これらの項目評価以外に、自由に思っていることを書くことができる「ひとこと欄」を設けた。ここには、評価項目以外に感じたことや、アドバイスなどを好きなように書いてもらった。

また、この評価シートは、無記名式にした。誰が評価したのかを分からないようにして、生徒役の学生た

以下の評価項目について、1～5の数字で答えてください。

- 1 - 全くそう思わない 2 - どちらかといえばそう思わない
3 - どちらとも言えない 4 - どちらかといえばそう思う
5 - とてもそう思う

1. 授業の準備物は適切であった。(プリントなど)
2. 声の大きさや明瞭性は適切だった。
3. 教材研究は十分に行われていた。
4. 黒板の字はわかりやすかった。
5. 授業時間が有効に使われていた。
6. 授業内容の難易度は適切だった。
7. 授業内容の量は適切だった。
8. 授業の進度はちょうどよかった。
9. 授業の進行はスムーズだった。
10. 教具(パソコン・OHPなど)の使い方は適切だった。
11. 授業に集中して取り組めた。
12. 学習内容に興味・関心が持てた。

この授業に対する総合評価を5段階で記入。

ちに評価させ、模擬授業終了時に、私が目を通して、その場で模擬授業担当者に持ち帰らせた。

4. アンケートについて

後期のレポート課題の1つに「この講義に対するアンケート」を課した。講義に対するものであるが、模擬授業について行った内容がほとんどを占めている。有効回答数は37名(模擬授業14グループ)であった。アンケート項目は以下の通りである。詳しい結果については後で述べることにする。

- Q1. 模擬授業を行った分野は何でしたか？
- Q2. 模擬授業を行ったグループの人数は何人でしたか？
- Q3. なぜ Q1. の分野をしようと思いましたか？
- Q4. 模擬授業の形式・時間配分はどうしましたか？
- Q5. 模擬授業での自分の分担した時間は40分中何分でしたか？
- Q6. プレゼンソフトを使いましたか？
- Q7. プリント資料を用いましたか？
- Q8. 模擬授業の準備にはどのくらいの時間をかけましたか？
- Q9. 模擬授業のリハーサルは何回しましたか？
- Q10. 模擬授業の準備の時点で、自分たちなりに工夫したところはどのような点ですか？
- Q11. 模擬授業の「40分」という時間はどのように感じましたか？
- Q12. 当初、模擬授業に対する抵抗感はありましたか？
- Q13. 当初から、模擬授業はしてみたかったですか？
- Q14. 模擬授業をやり終わって、どう思いましたか？
- Q15. 模擬授業はやりやすかったですか？
- Q16. 模擬授業を終わってみての率直な感想を述べてください。
- Q17. 模擬授業を終えて、どういう点が反省点ですか？
- Q18. 模擬授業をする前、情報の授業のイメージは出来ていましたか？
- Q19. 模擬授業をしたあと、情報の授業のイメージが出来ましたか？
- Q20. 教育実習に行くことを踏まえると、模擬授業をしたことによって自分の中で何か変化したことはありますか？
- Q21. 模擬授業全般に対しての意見などあれば自由に書いて下さい。
- Q22. 模擬授業中、ビデオを撮られていることは気になりましたか？
- Q23. 自分の模擬授業に対する評価シートを見て感じたことはどのような点ですか？
- Q24. 自分の模擬授業に対する評価はどうでしたか？
- Q25. 他人の模擬授業に対する評価はどのようにしましたか？
- Q26. Q25. のようにしたのはなぜですか？
- Q27. 自分の模擬授業に対する評価シートのひとこと欄はみんな率直に書いてくれていましたか？
- Q28. シートの評価項目について意見があれば書いてください。
- Q29. 評価シート全般についての意見があれば書いてください。
- Q30. 情報科教育法の講義全般について、意見、改善点、印象に残っていることを書いてください。

5. 結果分析

ここで、アンケートの結果について、いくつか見られる特徴に絞って述べたいと思う。

受講している学生たちが「現代社会学部」に所属していることが大きく反映されている

Q1.においては、「情報B」の中から模擬授業の分野を選び出しているのは14グループ中、1グループのみであった。特に多かったのが、著作権や情報モラルに関する分野で、これらは、学生が現代社会学部に所属していることが大きく反映しているのではないかと考える。また、Q3.では、自分がその分野を選んだ理由として、「授業がしやすいと思った」や「イメージが湧きやすかった」などが挙げられ、学部としての特性が大きく出ているのではないと思われる。

模擬授業の準備にあまり時間をかけていない

Q8.において、模擬授業の準備にかけている時間は、大きく分けて、3日以内である学生と、1週間以上かけた学生の2グループに分かれた。Q9.においても、リハーサルを1回もしなかった学生が5人もいて、これについては「自分で最低でも1回はするように。」と呼びかけたにもかかわらず、していなかった。

プロの教員であれば、時と場合によるが、1時間分の授業の準備に1時間かからないときもある。しかし、授業に慣れていない学生たちにとっては、しっかり準備に時間をかけないと授業のイメージもできない。模擬授業を見ていると、やはり、準備に時間をかけ、リハーサルをしっかり行っているグループにおいては、出来がしっかりしているし、準備にあまり時間をかけなかったグループにおいては、教材研究不足、時間配分ミスなど、準備不足がはっきり現れる結果となった。

積極的に取り組んでいる学生と、そうでない学生との差が大きい

Q11.の「40分」という時間をどう感じたかという質問において、「短い」と答えた学生は、自分が模擬授業でいたいことに対して、どのように40分でまとめればよいかを考え、相当工夫したように思われる。それに対して、「長い」と答えた学生は、どのようにして40分間引き延ばすかということを考えた結果、実際40分の授業ができなかった(相当早く終わった)グループや、40分持たせるために、少し間延びした授業になったグループなどがあつた。また、Q13.においても、模擬授業を「してみたかった」と答えた学生が13人いたのに対して、「したくなかった」と答えた学生が14人いた。これらについては、自分たちがどれだけ積極的に模擬授業について考えたのか、また、実際に模擬授業を行ってみて生徒役の学生たちがどのように感じたのかというところに現れるものとなり、評価シートにもはっきり書かれていたようだ。

教科「情報」の授業のイメージがほとんどない

Q18.および、Q19.について、情報の授業のイメージは、模擬授業を通して、少しはできてきたという結果が得られた。現在受講している学生たちは、旧カリキュラムの生徒で、情報の授業を経験していない。情報の授業のイメージをつかむことも重視して講義を進め、実際に高等学校に情報の授業参観に出かけたりもしているが、それにも限度があり、なかなかイメージがつかめないのが実態である。より深く教科の内容を理解するためにも、1回とは言わずに、2~3回程度、模擬授業をさせることができればと思う。

模擬授業に対する評価基準が曖昧である

Q24.および、Q25.について、自分の模擬授業については、評価が厳しいと感じ、他人の模擬授業については、率直に評価したという学生が最も多かった。しかし、中には、様々な理由によって甘く評価した学生も10人以上いた。また、自分に対していつも厳しく考えている学生は、他の人から甘く評価されていると感じたらしく、それも10人以上いた。

一応基準を設けてはいるが、学生によって様々で、付け方もいろいろあつた。講義の最初には、1人1人のためなので、率直に評価するように呼びかけている。それでも、自分の模擬授業に対して、率直

に書かれるのを嫌がる学生もあり、彼女たちは甘く評価したようだ。評価については難しい点多いと思うが、ある程度同じ基準で評価できればと考え、その方法を練っている最中である。

6. おわりに

前年度、受講した学生があまりにも多すぎて、希望者を募って模擬授業を行った。私が予想していたとおり、希望者は少なく5グループだった。模擬授業をした学生に話を聞くと、「最初どうしようと考えたが、今となっては模擬授業をして良かった。」という感想が多かった。また、模擬授業をしなかった学生からは、「結局しなかったが、いろいろな人が模擬授業をしているのを見ると、自分もやっておけば良かった。」などという言葉が多く聞かれた。私の中には、「教育法の授業でもあるし、受講生全員に模擬授業をさせたかった。」という気持ちが相当大きなものとなり、今年度の講義を迎えた。

今年度は、受講生が約40人であったということもあり、全員に模擬授業をさせてみた。限られた時間の中であるが、使えるだけの時間を最大限模擬授業にあてようと考えた。その方法としては、講義1回(90分中)に、2グループの模擬授業(40分×2)をさせる形しか考えられなかった。もしかすると、もっと良い方法があったかもしれないが、終えてみると、全員にさせるにはこれが精一杯だったと思う。本来であれば、グループも作らせず、1人50分で全員に模擬授業をしてもらえればよいのだが、受講生が半分に減少しても無理だと思う。

今回、学生たちを見ていて感じたことは、先程も述べたように、「できるだけ労力を少なくして、良いものを作ろうとする」学生が多いことである。模擬授業当日までに、授業の中身や、使用するプレゼンなどについて、メールを用いて打ち合わせしていても、適当にやっていると感じさせるものが多い。そして、そう思った模擬授業は、高い確率で成功しない。おそらく、このことだけでなく、あらゆることに対してそういった考え方をしているのだと思うが、将来、教員になることを視野に入れるのであれば、この考え方では到底やっていけないと思う。また、プレゼンソフトを使っている学生も多かったが、そのプレゼン能力は、お世辞にも高いとは言えない。彼女たちのカリキュラムでは、大学に入学してからコンピュータに関わった学生も多く、高校生までに現在行われているような情報教育を受けてきていないので、当然とも言える。当分の間は、そのような学生が多いので、講義の中で、プレゼンについての実習(1分間スピーチなど)を取り入れてみても良いのではないかと思った。これらについては次年度に生かしていきたい。

この模擬授業への取り組みを通して、学生たちが大きく変わったと感じられることは、模擬授業をする前と、終わった後で、授業そのものの受け止め方が大きく変わっていることである。私が講義をしていて、模擬授業前と後で、講義の雰囲気が変わったように感じたのである。最後の模擬授業が終わったあと、40分ほど余ったので、私が、模擬授業全体の反省をした。全員が行った模擬授業に対して、特徴は何か、良くなかったところはどこか、良かったところはどこかなどを、率直に話した。次の最終回の講義では、始めにも述べたが、情報科の問題点とこれからの課題について講義した。これらの話を学生たちは真剣に聞いていた。模擬授業という取り組みを通しての意識の変化だと思う。実際、2年後には母校に戻り教育実習をする。模擬授業をすることによって、そういったことが現実味を帯びてきたということなのだろう。

情報科教育法という講義の中で、模擬授業の占める位置は大きかったと思う。模擬授業を行った学生たちが、その場ですぐ、全員が書いた評価シートに目を通しながら、「もう少し、あの部分をこうしておけば良かった。」とか「くやしい、もう1回したい。」といったような感想を言っているのを聞くと、この取り組みも、教職の講義として、大きな意味を持ったと思う。反省すべき点多いと思うので、来年度は、解消できる点に関してはできるだけ行い、今年度以上に、大きな取り組みとして行っていきたいと考える。